

# 近代文学作品論叢書

不朽の名作は論じつくされることがない！

すでにある論点の再確認から  
新たな視点・発想へ

死者の書	14
沢東綺譚	13
村の家	12
雪国	11
Ambarvalia	10
夜明け前	9
和解	8
渋江抽斎	7
土	6
夢十夜	5
蒲団	4

田山花袋  
夏目漱石  
長塚節  
森鷗外  
志賀直哉  
島崎藤村  
西脇順三郎  
川端康成  
中野重治  
永井荷風  
釈迢空

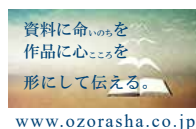
大空社 1995-1998 刊行

残部  
僅少

(2024.9.15)

信頼おける編者が作品論を厳選  
影印で複製する引用に便利な資料  
解説・文献目録付き

\* 日本近代文学研究関係書 .....15



学術資料出版  
大空社出版

# 近代文学作品論叢書

大空社 1995-1998 刊行

- この案内（目次抄）は現在（2023.9）「在庫がある」ものを中心に紹介しています。  
⇒一覧最終ページ

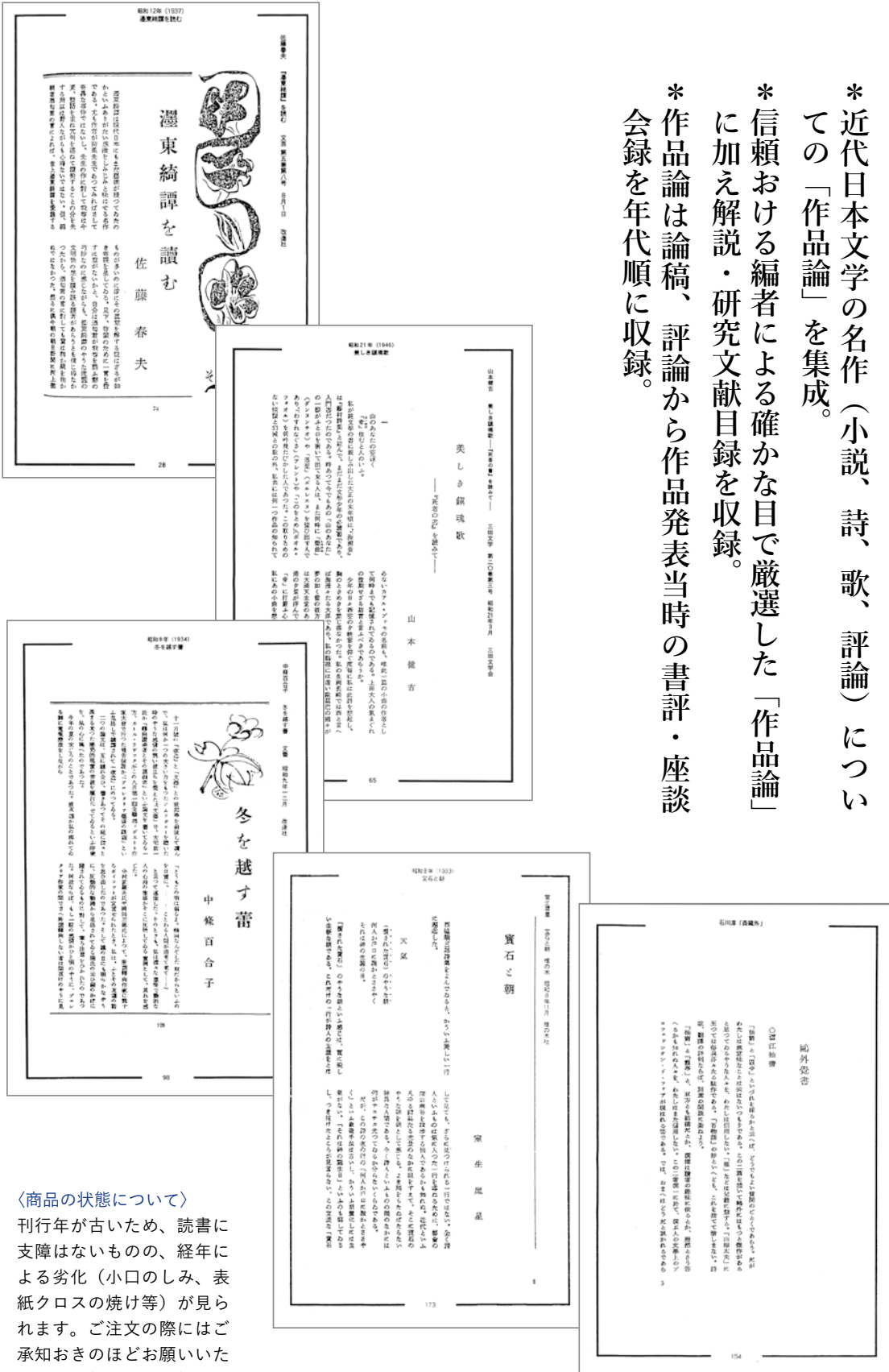
## 研究業績を俯瞰

## さらなる探究のステージへ！

\* 近代日本文学の名作（小説、詩、歌、評論）についての「作品論」を集成。

\* 信頼おける編者による確かな目で厳選した「作品論」に加え解説・研究文献目録を収録。

\* 作品論は論稿、評論から作品発表当時の書評・座談会録を年代順に収録。



〈商品の状態について〉  
刊行年が古いので、読書に支障はないものの、経年による劣化（小口のしみ、表紙クロスの焼け等）が見られます。ご注文の際にはご承知おきのほどお願いいたします。（大空社出版）

昭和59年(1984)  
「夢十夜」の作品世界 女性による研究誌

大岡昇平

幻想の生れる場所—『夢十夜』をめぐる— 群像 第四〇巻第一号 昭和60年1月1日 講談社



## 幻想の生れる場所

—『夢十夜』をめぐる—

大岡昇平

漱石の作品は概して姦通もしくは、いわゆる三角関係を扱っています。偏執といってもいいほど同じ主題を追求しています。人物の行動と心理をリアリスチックに物語に仕立てたもので、登場人物は穏健な中流の知識階級です。市民文学といわれ、彼が国民的規模で今日まで人気のある理由ですが、私たちの世代、という昭和二年で十八歳、彼の第一期全集第二回配本(大正十年頃)を中学生として読んだ世代には、生ぬるく見えました。フランスのボードレー、ランボーに比べると「自我の燃焼が足りない」なんて、中原中也が昭和二年の日記に書いています。小林秀雄、河上徹太郎にも漱石論はありません。ただ漱石は内に狂気を秘めていて、家庭では激しい面を見せていたのが、鏡子夫人の『漱石の思ひ出』(昭和三年)からわかって来て、その内部にかくされていたものが、注目される

ようになったのです。

漱石には普通の長篇小説のほかに、初期の「濃虚集」の系統のロマンチックな短篇の流れがあります。朝日新聞にはほぼ年に一篇の割合で長篇小説を書く合間に、「夢十夜」(明治四十一年)「永日小品」(四十二年)など、幻想的な短文、随想を書いています。そこに却って彼の心の深層が露呈している、という説がこの頃は有力です。特に「夢十夜」には、こわい話があつて、弟子の内田百閒はこの作風を受け継いで「冥途」という作品集を大正十一年に出しています。百閒は戦後の『百鬼園随筆』『阿房列車』シリーズが有名ですが、私たちは戦前のこの作品を高く評価していました。私は富永太郎の残した本で読みました。「夢十夜」もそうですが、短い散文詩のような作品なので、散文詩人であった富永にふさわしい蔵書でした。

残部  
3組

# 田山花袋 蒲団

加藤秀爾 編

収録作品論 92 点

全 3 巻 総 1370 頁

### 第I巻 目次

『蒲団』研究小史

加藤秀爾 1

田山花袋『蒲団』作品論研究文献目録

加藤秀爾 編 11

田山花袋『蒲団』作品論 I

明治四〇年(1901)

小栗風葉／正宗白鳥／徳田(近松)秋江／片上天弦／水野葉舟／松原至文／中村星湖／相馬御風／星月夜(島村抱月)

『蒲団』合評

太田正雄(木下李太郎)／平出 修／天野逸人／与謝野 寛(鉄幹) 37

中山路峰 花袋氏の作『蒲団』

一 記者 『蒲団』を読む

横山よし子 『蒲団』について

大正四年(1915) 『蒲団』、『縁』及

永代美知代 『蒲団』、『縁』及

昭和四年(1925) 無署名 花袋『蒲団』の

無署名 花袋と『蒲団』

### ●目次より (縮小)

### 第II巻 目次

田山花袋『蒲団』作品論 II

昭和四一年(1966)

大久保典夫 自然主義と私小説——『蒲団』をめぐる—— 5

橋本 威 『蒲団』論序説 11

昭和四二年(1967) 岩永 胖 再び『蒲団』の虚実について 25

昭和四三年(1968) 大久保典夫 文学史的位置づけ 蒲団 田山花袋 45

昭和四四年(1969) 田中栄一 田山花袋論——『蒲団』を中心として—— 57

昭和四五年(1970) 長谷川吉弘 『蒲団』について——時男の苦悩を中心に—— 81

平野 謙 解説 田山花袋 85

堀井哲夫 花袋一人の女と『蒲団』『縁』 96

昭和四七年(1972) 山本昌一 『蒲団』ノート 111

昭和三年(1948) 神崎 清 名作モデル考 田

昭和四四年(1949) 片岡良一 自然主義文学研究

昭和五五年(1950) 中村光夫 風俗小説論(上)

昭和二六年(1951) 和田謹吾 『蒲団』 37

### 第III巻 目次

田山花袋『蒲団』作品論 III

昭和五九年(1984)

高橋敏夫 『蒲団』の部屋——排除としての近代—— 5

大久保典夫 『蒲団』新論——キリスト教告発の小説—— 11

尾形明子 田山花袋『蒲団』の芳子 12

昭和六〇年(1985) 土佐 亨 蒲団の匂い——比較文学的ノート—— 19

高橋敏夫 『蒲団』——「暴風」に区切られた物語—— 31

昭和六一年(1986) 大里恭三郎 田山花袋『蒲団』論——滑稽家の悲哀—— 45

昭和六二年(1987) 柳田輝嘉 田山花袋『蒲団』——語り手の位置・覚え書—— 87

野口武彦 田山花袋『蒲団』 108

昭和五〇年(1975) 田所 周 見えないもの——『蒲団』試論—— 151

昭和五一年(1976) 千葉俊二 花袋『蒲団』断想 163

重松泰雄 『蒲団』管見——その喜劇性に触れて—— 172

片山晴夫 『蒲団』——「竹中時雄」論—— 185

浜本 孝 『蒲団』論——花袋の自己探求と自己否定—— 194

谷口重人 「少女病」から『蒲団』への飛躍 198

市村直子 自然主義文学における『蒲団』 202

鈴木郁子 『蒲団』における田山花袋の思想の断片 208

笠井稔雄 『蒲団』の文学的意義とその限界 218

尾形明子 『蒲団』試論 232

永藤 武 神道文学論への試み 245

——私小説における「事実」をめぐる——



残部  
2組

# 夏目漱石 夢十夜

坂本育雄 編

収録作品論 117 点

全 3 巻 総 1580 頁

### 第I巻 目次

『夢十夜』作品論集成 解説

坂本育雄 1

夏目漱石『夢十夜』作品論研究文献目録

坂本育雄 編 21

夏目漱石『夢十夜』作品論 I

昭和24年(1949) 伊藤 整

明治43年(1910)

安倍生(安倍能成) 夏目漱石の『四篇』

昭和29年(1954) 荒正人

島田司馬太 著 四篇 夏目漱石著

昭和29年(1954) 山本捨三

東渡生(安倍能成) 『四篇』を読む(上)(下)

昭和30年(1955) 唐木順三

大正6年(1917)

赤木桁平 『四篇』

### 第II巻 目次

昭和30年(1955) 江藤 淳

昭和11年(1936)

柴田治三郎 ドイツ譯

夏目漱石『夢十夜』作品論 II

昭和12年(1937)

ハイント・ブラッシ

山中節子 この現実の壁の向こうに—漱石とギリシャ

荒正人 解説

内田道雄 漱石の自然—そのまえがきとして

昭和49年(1974)

小坂晋 赤い井守の腹—『夢十夜』の謎

山本勝正 漱石『夢十夜』の世界—漱石に於ける夢と現実

昭和50年(1975)

藤田修一 『夢十夜』小説

大岡昇平 漱石とキリスト教

昭和53年(1978)

紅野敏郎 『四篇』『夢十夜』の不安と願望

佐藤泰正/越智治雄/平岡敏夫/高木文雄/相原和邦 『夢十夜』をどう読むか(シンポジウム)

昭和18年(1943) 洪川 驥

夏目漱石論

85

### 第III巻 目次

夏目漱石『夢十夜』作品論 III

昭和59年(1984)

石原千秋 『夢十夜』における他者と他界

宮井一郎 『夢十夜』

金戸清高 漱石『夢十夜』の世界

高崎みどり 『夢十夜』の作品世界

昭和60年(1985)

大岡昇平 幻想の生れる場所—『夢十夜』をめぐる

笹淵友一 新稿『夢十夜』論—第十夜

松島芳昭 生の不安 漱石『夢十夜』

昭和62年(1987)

越智悦子 『夢十夜』を読む—『第二夜』短刀と侍

松元季久代 『夢十夜』第一夜—字義の意味の蘇生

亀井雅司 『夢十夜』の視線

昭和63年(1988)

百川敬仁 夏目漱石—夢十夜 主題化する時間

大竹雅則 『夢十夜』—生のかなしみ

宮澤健太郎 『夢十夜』の文体論的考察

昭和53年(1978)

野村純一 『夢十夜』と口承文芸(研究ノート)

中村宏子 夏目漱石—『夢十夜』の世界

榎山久雄 不明不暗に生きるもの

関谷由美子 夏目漱石試論 I

笠原伸夫 夢の文学 夢の原層へ—夏目漱石

平井敬員 『夢十夜』論の現在

相原和邦 『夢十夜』の世界

昭和53年(1978)

高橋英夫 漱石における夢—『夢十夜』に触れつつ

下山ちづ子 『夢十夜』の構造

平成元年(1989) 石井和夫 『夢十夜』

尹相仁 『夢十夜』

大坪利彦 『夢十夜』

清水孝純 『夢十夜』

平成2年(1990) 山田 晃 父母未

平成3年(1991) 石井和夫 『夢十夜』

山崎甲一 『夢十夜』

中原豊 『夢十夜』

仲秀和 『夢十夜』

平成4年(1992) 山崎甲一 『夢十夜』

平成5年(1993) 古井由吉 凝滞す

### ●目次より (縮小)

156	『夢十夜』をどう読むか(シンポジウム)	347
151	佐藤泰正/越智治雄/平岡敏夫/高木文雄/相原和邦 『夢十夜』をどう読むか(シンポジウム)	341
136	大岡昇平 漱石とキリスト教	332
131	藤田修一 『夢十夜』小説	327
113	昭和50年(1975) 藤田修一 『夢十夜』小説	321
99	山本勝正 漱石『夢十夜』の世界—漱石に於ける夢と現実	294
65	昭和49年(1974) 小坂晋 赤い井守の腹—『夢十夜』の謎	280
65	昭和53年(1978) 野村純一 『夢十夜』と口承文芸(研究ノート)	270
65	昭和53年(1978) 中村宏子 夏目漱石—『夢十夜』の世界	269
65	昭和53年(1978) 榎山久雄 不明不暗に生きるもの	269
65	昭和53年(1978) 関谷由美子 夏目漱石試論 I	269
65	昭和53年(1978) 笠原伸夫 夢の文学 夢の原層へ—夏目漱石	269
65	昭和53年(1978) 平井敬員 『夢十夜』論の現在	269
65	昭和53年(1978) 相原和邦 『夢十夜』の世界	269
65	昭和53年(1978) 高橋英夫 漱石における夢—『夢十夜』に触れつつ	269
65	昭和53年(1978) 下山ちづ子 『夢十夜』の構造	269

# 長塚節 土

梶木剛・河合透 編

収録作品論 104 点

全 4 巻 総 2020 頁

第1巻 目次

『土』誌

梶木剛

1

長塚節『土』作品論研究文献目録

梶木剛・河合透 編

59

長塚節『土』作品論 I

明治四十五年(1912)

夏目漱石 「土」に就て(長塚節『土』)

安倍能成 長塚節氏の『土』

133 117

大正四年(1915)

夏目漱石 釣鐘の好きな人

鈴木三重吉 長塚節氏の追憶

橋詰孝一郎 思ひでのか

142 139

大正六年(1917)

小島政二郎 日本自然主

大正十一年(1922)

犬田 卯 長塚節氏を

和田 伝 解説(長塚節『土』〈新潮文庫  
中野重治 解説(現代日本小説大系)

昭和二十八年(1953)

唐木順三 解説(長塚節『土』〈創元文庫  
森下金二郎 長塚節『土』論

昭和二十九年(1954)

玉井敬之 『土』について

橋本 佳 『土』のリアリズム

井上 清 長塚節『土』(『岩波講座 文学の創造と鑑賞』)

昭和三十年(1955)

中野重治 『土』について

白井吉見 解説

飯野農夫也 郷土から見た長塚節

鶴田知也 長塚節の描寫法——『土』は読みづらいか?——

杉浦明平 『土』について

128 122 114 111 101 80

第III巻 目次

長塚節『土』作品論 III

昭和四十九年(1974)

篠田一士 この珍貴の感覚(上)——詩から小説へ——

橋本 佳 『土』論その後

篠田一士 この珍貴の感覚(下)——詩から小説へ——

中野孝次 『土』と漱石と白鳥と

53 36 21 5

昭和五十年(1975)

井上俊夫 長塚節

若杉 慧 『土』の

昭和五十一年(1976)

山田清三郎 長塚節

昭和五十二年(1977)

饗庭孝男 小説の場

若杉 慧 『土』の

昭和五十三年(1978)

真鍋亜紀子 長塚節論

小田 実 『土』の

昭和五十七年(1982)

小瀬千恵子 『土』の性格(『長塚節文学考』)

林 正子 『土』論——インセスト問題・反措定への試み——

昭和五十八年(1983)

広瀬朱実 『土』における写生の方法と長塚節

中村良衛 『土』論の試み(『長塚節『土』を読む』)

昭和六十一年(1986)

山下惣一 山下惣一さんと土をよむ

岩佐壮四郎 『土』——(人事)と(自然)の劇——

平岡敏夫 『世紀末の自然主義——明治四十年代文学考——』

平岡敏夫 『新鏡研究叢書9』

昭和六十二年(1987)

村上林造 『土』序文と『彼岸過迄』

村上林造 『土』論の系譜

中尾 務 近代日本精神史の側面として——

中尾 務 オージーのなかのインセスト

——長塚節『土』小見——

# 森鷗外 渋江抽齋

(品切)

長谷川泉 編

収録作品論 37 点

全 1 巻 総 520 頁

●目次より (縮小)

解説

長谷川 泉

1

森鷗外『渋江抽齋』作品論と解題

第一部

- 吉田増蔵 森先生に就て……………
- 一戸 努 鷗外作「澀江抽齋」の資料……………
- 森潤三郎 鷗外森林太郎傳……………
- 木下李太郎 藝林問歩……………
- 木下李太郎 鷗外先生の評論と史伝……………
- 宇野浩二 鷗外作品の現実描写……………
- 一戸 努 鷗外先生の蔵書……………
- 林 達夫 鷗外における小説の……………
- 高羽四郎 鷗外の考証家傳……………

第二部

- 森潤三郎 鷗外森林太郎……………
- 森鷗外 澀江抽齋……………
- 森鷗外 齋藤茂吉「解説」、内容目次、……………
- 高橋義孝 歴史小説論……………
- 高羽四郎 森鷗外の史的作品 下……………
- 秋山光夫 あの日の日―鷗外追憶―……………
- 伊藤至郎 鷗外論稿……………
- 石川 淳 森鷗外……………
- 唐木順三 鷗外の精神……………
- 日夏耿之介 鷗外文学……………
- 高橋義孝 森鷗外―文藝学試論―……………
- 伊藤 整 小説の問題……………
- 伊藤佐喜雄 医儒たちへの郷愁……………
- 岩上順一 歴史文学論……………
- 日夏耿之介 鷗外創作力の発展と終局……………
- 唐木順三 森鷗外……………
- 西尾 實 作品研究 鷗外の歴史小説……………

307 297 293 272 257 223 211 192 145 130 11

稲垣達郎 森鷗外……………

三島由紀夫 文章読本……………

長谷川 泉 森鷗外論考……………

附 中国語訳

昭和女子大学近代文学研究室 森鷗外……………

渋川 驍 澀江抽齋……………

長谷川 泉 現代文章の味わい方……………

附 中国語訳

石川 淳 森鷗外……………

附 竹盛天雄 解説

板垣公一 森鷗外の史伝―『澀江抽齋』論―……………

小泉浩一郎 森鷗外論 実証と批評……………

松木 明 渋江抽齋人名録……………

山崎一類 森鷗外・史伝小説研究……………

近代作家用語研究会教育技術研究所編 作家用語索引 森鷗外 第五巻 澀江抽齋……………

小泉浩一郎 "Edwin McClellan: Woman in the Crested Kimono"……………

稲垣達郎 森鷗外の歴史小説……………

# 志賀直哉 和解

(品切)

池内輝雄 編

収録作品論 72 点

全 2 巻 総 820 頁

第1巻 目次

「和解」解説

池内輝雄

1

志賀直哉『和解』作品論研究文献目録

池内輝雄 編

13

志賀直哉『和解』作品論 I

池内輝雄 編

13

大正六年(1917)

十束浪人 文芸雑誌瞥見(一)

大正二年(1917)

35

江口 渙

志賀直哉氏と谷崎精二氏との作品(出来秋 二)

大正二年(1917)

36

小宮豊隆

『和解』を読んで

志賀直哉

37

近松秋江

文芸時事(下)

福士幸次郎

38

南部修太郎

志賀直哉氏の『和解』

藤森淳三

39

A・B・C・D合評

志賀直哉氏の『和解』(黒潮)〈十月の創作〉

47

佐藤春夫

人と作品とがそと

47

和辻哲郎

今年の創作界に就

47

江口 渙

創作壇に活動せる

47

長田秀雄

大正六年文芸界の

47

野上豊一郎

大正六年文芸界の

47

岩野泡鳴

大正六年文芸界の

47

大正七年(1918)

近松秋江 「第二の母」と「和解」

〔諸家 文章の印象(其六) 志賀直哉氏の文章〕

75

西宮藤朝

志賀直哉氏の『夜の光』(最近文壇の収獲)

77

菊池 寛

志賀直哉氏の作品

85

大正八年(1919)

広津和郎 志賀直哉論(文壇新人論4)

95

第II巻 目次

志賀直哉『和解』作品論 II

根津 隆

35

昭和三〇年(1975)

鹿野達男 父との不和 和解

5

昭和三一年(1976)

池内輝雄 「和解」論

15

昭和三二年(1977)

国松 昭 志賀直哉における「和解」

23

昭和三三年(1978)

広藤玲子 志賀直哉論III 「和解」と「或る男、其姉の死」

39

昭和三四年(1979)

亀井雅司 「和解」の構造

55

昭和三五年(1980)

大江健三郎 志賀直哉「和解」——「かたまり」の読みとり——

69

昭和三六年(1981)

宮越 勉 志賀直哉——その青春の終焉——

99

昭和五七年(1982)

——その対他的意識をめぐって——

340

昭和五八年(1983)

近代日本文学史への視点(6)

340

昭和五九年(1984)

志賀直哉における父と子(四)

346

昭和六〇年(1985)

「黒い魔術」からの解放

346

昭和六一年(1986)

近代日本文学史への視点(7)

356

昭和六二年(1987)

「時任謙作」の形成と分裂

356

●目次より(縮小)

昭和三五年(1960)	坂上 弘	志賀直哉の「和解」(作家論への試み)	263	竹盛天雄	340
昭和三七年(1962)	紅野敏郎	作家・作品の鑑賞と研究 志賀直哉「和解」(鑑賞)	269	町田 栄	346

昭和三四年(1959)	今野 宏	志賀直哉の調和的精神	99	三木 卓	99
昭和三三年(1947)	荒 正人	父と子——志賀直哉における「家」——	55	町田 栄	55
昭和三二年(1946)	岩上順一	志賀直哉論——和解への道——	39	西垣 勤	39
昭和九九年(1934)	長崎謙二郎	「和解」の空隙	15	大久保定典	15

昭和五五年(1980)	大江健三郎	志賀直哉「和解」——「かたまり」の読みとり——	69	関谷一郎	69
昭和五六年(1981)	宮越 勉	志賀直哉——その青春の終焉——	99	関谷一郎	99

昭和五〇年(1975)	鹿野達男	父との不和 和解	5	本多秋五	5
昭和五一年(1976)	池内輝雄	「和解」論	15	昭和六〇年(1985)	大久保定典
昭和五二年(1977)	国松 昭	志賀直哉における「和解」	23	昭和六一年(1986)	西垣 勤
昭和五三年(1978)	広藤玲子	志賀直哉論III 「和解」と「或る男、其姉の死」	39	昭和六二年(1987)	町田 栄
昭和五四年(1979)	亀井雅司	「和解」の構造	55		

大正七年(1918)	近松秋江	「第二の母」と「和解」	75	大正八年(1919)	広津和郎	志賀直哉論(文壇新人論4)	95
大正八年(1919)	西宮藤朝	志賀直哉氏の『夜の光』(最近文壇の収獲)	77				
	菊池 寛	志賀直哉氏の作品	85				



残部  
2組

# 島崎藤村 夜明け前

剣持武彦 編

収録作品論 187 点

全 4 巻 総 2100 頁

### 第一巻 目次

解説

剣持武彦 1

島崎藤村『夜明け前』作品論研究文献目録

剣持武彦 編 11

島崎藤村『夜明け前』作品論 I

田村栄太郎  
田村栄太郎  
田村栄太郎  
正 宗 白 鳥  
松 岡 謙  
板 垣 直 子  
原 実  
青 野 季 吉

昭和四年(1929)

川端康成 文芸時評 島崎氏の「夜明け前」……

昭和八年(1919)

昭和六年(1931)

田村栄太郎 「夜明け前」の史的考察(一)  
|| 主として伝馬助郷制度に就て ||

久米正雄  
折 焚 柴 夫

田村栄太郎 「夜明け前」の史的考察(二)  
|| 主として伝馬助郷制度に就て ||

昭和九年(1919)

田村栄太郎 「夜明け前」の史的考察(三)  
|| 主として伝馬助郷制度に就て ||

昭和五年(1915)

昭和七年(1932)

青野季吉 島崎藤村

川端康成 文芸時評

島崎藤村

田村栄太郎 再び

昭和三年(1958)

吉田精一 「夜明け前」……

昭和四年(1959)

山田 晃 藤村覚書——『夜明け前』における「家」——

昭和三年(1961)

新田 潤 夜明け前 島崎藤村  
何かを避けて上品な墨絵に美化している……

松島米一 夜明け前 島崎藤村  
草叢の間に歴史の視点を定めたりアルさ……

昭和七年(1962)

三好行雄 夜明け前……

伊東一夫 島崎藤村と木曾……

エドウィン・マックレラン/田中西二郎訳 藤村の世界——『夜明け前』と「家」を中心に……

昭和三八年(1963)

篠田一士 「夜明け前」——伝統と前衛の狭間に(その七)——

篠田一士 「夜明け前」(承前)

——「伝統と前衛の狭間に(その八)——

……

再び「夜明け前」を評す 社会経済史的考察……(一) 70  
再び「夜明け前」を評す 社会経済史的考察……(二) 71

昭和五四年(1979)

十川信介 魅るもの——『夜明け前』と先行作品——

早坂禮吾 「夜明け前」の文芸性……

平岡敏夫 「夜明け前」論への出発……

剣持武彦 「夜明け前」と「安曇野」……

「夜明け前」への批評と論争……

昭和五七年(1982)

赤尾利弘 藤村「夜明け前」——万延元年の彗星について……

森安理文 藤村の——特——

毛利正守 島崎正——

昭和五八年(1983)

紅野謙介 「復古」

十川信介 「風」と

松本健一 〈転向〉

昭和五九年(1984)

紅野謙介 「夜明け

昭和六〇年(1985)

高阪 薫 「夜明け

小泉浩一郎 「夜明け

### 第IV巻 目次

島崎藤村『夜明け前』作品論 IV

昭和六二年(1987)

桶谷秀昭 「夜明け前」(上)〈文明開化と日本的想像18〉……

桶谷秀昭 亡びゆく父たち——『夜明け前』(下)〈文明開化と日本的想像19〉……

赤尾利弘 藤村「夜明け前」——岩瀬肥後守について——

ウィリアム・E・ナフ 島崎藤村の世界史的作用

——「夜明け前」の英訳を完成して——

昭和六三年(1988)

小仲信孝 「夜明け前」の反近代——狂気の反転——

新井正彦 生駒勘七と山村代官屋敷……

篠田一士 「夜明け前」——二十世紀の十大小説(最終回)——

平成元年(1989)

塩地壽夫/桜井義夫/竹内好徳/藤田 寛/三次 茂 座談会(第五回)『日本文学の探究』

島崎藤村「夜明け前」をめぐる(続)

藤田 寛 「夜明け前」に現われた政治と文学……

櫻井義夫 「夜明け前」に見る国際性……

……

……

……

……

アムバルワリア

西脇順三郎

# Ambarvalia

残部  
5組

澤正宏 編

収録作品論 56 点

全 2 巻 総 760 頁

第 1 巻 目 次

『Ambarvalia (アムバルワリア)』研究史の概要 澤 正宏 1

西脇順三郎『Ambarvalia (アムバルワリア)』  
作品論研究文献目録 澤 正宏 編 11

昭和一〇年(1935) 阪本越郎 『西脇順三郎小論 Ambarvalia の精神』…………… 57  
昭和二八年(1953) 村野四郎 解説……………  
昭和三〇年(1955) 鶴沢 覚 現代詩鑑賞 西脇順三郎……………

第 2 巻 目 次

西脇順三郎『Ambarvalia (アムバルワリア)』作品論 II

昭和四四年(1969) 小海永二 Ambarvalia…………… 5

昭和四五年(1970) 西脇順三郎他4名 こころの衝撃力…………… 29

昭和四六年(1971) 中野嘉一 詩集『Ambarvalia (あむばるわりあ)』…………… 115

昭和四七年(1972) 芝山幹郎 Ambarvalia 27…………… 141

昭和四八年(1973) 澤 正宏 『Ambarvalia』論…………… 149

昭和五三年(1978) 越智良二 西脇順三郎「ギリシヤ的抒情詩」小考…………… 159

昭和五四年(1979) 飯島耕一 テラロタの夢と知れ 1924-1933…………… 169

千葉宣一 西脇順三郎「眼」…………… 234

平成五年(1993) 工藤美代子 寂しい声 西脇順三郎の生涯18…………… 347

平成六年(1994) 千葉宣一 西脇順三郎の基礎的研究▼国際的波動と方法的特質…………… 355

あとがき 澤 正宏…………… 373

● 目次より (縮小)

昭和四年(1929)	鍵谷幸信	西脇順三郎論(16) — Ambarvalia の成立 —…………… 189
	安部宙之介	西脇順三郎「皿」…………… 192
	西脇順三郎	他11名 西脇セシナー〈第一回〉Ambarvalia…………… 196
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第二回〉Ambarvalia…………… 214
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第三回〉Ambarvalia…………… 214
	西脇順三郎	他13名 西脇セシナー〈第四回〉Ambarvalia…………… 238
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第五回〉Ambarvalia…………… 259
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第六回〉Ambarvalia…………… 280
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第七回〉Ambarvalia…………… 301
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第八回〉Ambarvalia…………… 318
	西脇順三郎	他12名 西脇セシナー〈第八回〉Ambarvalia…………… 340
	安部宙之介	西脇順三郎「ギリシヤ的抒情詩」私解…………… 364

昭和九年(1934) 萩原朔太郎 難解の詩

千九百三

関 良一 ギリシヤ的抒情詩

関 良一 ギリシヤ的抒情詩…………… 141

西脇順三郎 近代人の憂鬱…………… 150

木下常太郎 解説 Ambarvalia (アムバルワリア) について…………… 171

岩崎良三/阿部知二他

室生犀星 宝石と朝…………… 43

百田宗治 詩作法…………… 39

百田宗治 西脇順三郎詩集(広告文)…………… 42

百田宗治 西脇順三郎詩集(広告文)…………… 36

百田宗治 西脇順三郎詩集…………… 37

西脇順三郎 詩集について…………… 38

昭和三八年(1963) 近藤 東 詩集『Ambarvalia』…………… 31

昭和四〇年(1965) 北川 透 西脇順三郎論ノート…………… 42

昭和四〇年(1965) 分銅惇作 西脇順三郎「ギリシヤ的抒情詩」…………… 43

残部  
5組

# 川端康成 雪国

岩田光子 編

収録作品論 89 点

全 3 巻 総 1310 頁

●目次より (縮小)

第一巻 目次  
解説

川端康成『雪国』作品論研究文献目録

岩田光子 編 33

川端康成『雪国』作品論 I

岩田光子 1

昭和9年 (1934)

神山 潤 〈新年号の創作時評・5〉巧妙なる手品師……………57

昭和22年 (1947)

伊藤 整

昭和11年 (1936)

小林秀雄 〈文芸時評〉作家の虚無感―川端康成の「火の枕」― 61

昭和27年 (1952)

杉浦明平

古谷綱武 「徒勞」について……………62

昭和28年 (1953)

伊藤 整

昭和12年 (1937)

青野季吉 川端・尾崎の文学……………71

昭和61年 (1986)

赤塚正幸 「雪国」論……………257

上司小剣 最後……………

昭和62年 (1987)

奥出健 「葉子」論―「雪国」への一考察―……………282

昭和13年 (1938)

板垣直子 現代……………

昭和63年 (1988)

辻本千鶴 川端康成の美学―「雪国」とのかかわり―……………317

昭和14年 (1939)

瀬沼茂樹 解説……………

昭和63年 (1988)

中島国彦 「雪国」の背後に潜むもの―一九三五年秋の湯沢滞在をめぐって―……………307

昭和32年 (1957)

瀬沼茂樹 解説……………

昭和63年 (1988)

世淵友一 雪国……………15

昭和34年 (1959)

篠田一士 川端文学における伝統の問題……………

昭和63年 (1988)

藤森重紀 川端美学の再検討(二)―「雪国」をてがかりに―……………38

昭和36年 (1961)

三枝康高 川端康成の芸術的抵抗―「雪国」における自然―……………

昭和63年 (1988)

エドワード・G・サイデンステッカー 英訳「雪国」序文……………46

昭和40年 (1965)

河村清一郎 「雪中火事」と「天の河」―「雪国」・結末の改稿をめぐって―……………293

昭和63年 (1988)

武田勝彦・長谷川泉 英訳「雪国」の発表当時の紹介と評価……………60

昭和41年 (1966)

田中保隆 「雪国」とその時代……………303

昭和63年 (1988)

長谷川泉 「雪国」の駒子(川端康成)……………76

310

昭和45年 (1970)

竹盛天雄 〈川端文学の作品構造〉雪国―序論として―……………81

昭和16年 (1940)

長谷川 泉 「雪国」論―理智の舞踏と抒情の彫像―……………121

坂本 浩 美の創造―「雪国」と「天の夕顔」……………113

昭和60年 (1985)

高橋有恒 涌田佑氏の「川端文学への新視点」について……………149

羽鳥徹哉 「雪国」を読む(その2・完)……………165

安田 武 真夏の「雪国」―川端康成の少女たち―……………208

長谷川泉 「勸進帳」と駒子……………214

上田 渡 「雪国」における駒子の神性……………218

羽鳥徹哉 「雪国」における自然……………229

昭和62年 (1987)

奥出健 駒子・その両義性―「雪国」への一考察―……………293

千葉宣一 川端文学のエロチシズムと無常の思想―「雪国」はなぜ、教科書に採用されないのか―……………300

中島国彦 「雪国」の背後に潜むもの―一九三五年秋の湯沢滞在をめぐって―……………307

昭和63年 (1988)

近藤裕子 川端……………

平成7年 (1995)

たつみ都志 川端……………

昭和63年 (1988)

世淵友一 雪国……………15

藤森重紀 川端美学の再検討(二)―「雪国」をてがかりに―……………38

エドワード・G・サイデンステッカー 英訳「雪国」序文……………46

武田勝彦・長谷川泉 英訳「雪国」の発表当時の紹介と評価……………60

長谷川泉 「雪国」の駒子(川端康成)……………76

昭和45年 (1970)

竹盛天雄 〈川端文学の作品構造〉雪国―序論として―……………81

# 中野重治 村の家

残部  
1組

佐藤健一 編

収録作品論 80 点

全 3 巻 総 1240 頁

●目次より (縮小)

第1巻 目次

『村の家』

佐藤健一

1

中野重治『村の家』作品論研究文献目録

佐藤健一 編 13

中野重治『村の家』作品論 I

昭和八年(1933)  
佐野 学・鍋山貞親

昭和十一年(1936)  
中野 学

146

共同被告同志に告ぐる書

昭和十一年(1936)  
亀井勝一郎

33

昭和九年(1934)

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

杉山平助 転向の流行について【上】

昭和十一年(1936)  
中野 学

45

杉山平助 転向の流行について【中】

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

板垣直子 文学の新動

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

杉山平助 転向作家論

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

大宅壮一 転向讚美考

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

貴司山治 文学者に就

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

貴司山治 文学者に就

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

貴司山治 文学者に就

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

貴司山治 文学者に就

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

貴司山治 文学者に就

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

貴司山治 文学者に就

昭和十一年(1936)  
中野 学

46

中條百合子(宮本百合子)

冬を越す蕾

82

昭和十一年(1936)

中野重治 転向作家論——文芸時評——

91

中野重治 「文学者に就て」について——貴司山治へ——

110

貴司山治 援軍との闘ひ——中野重治への反駁——

120

中野重治氏に——文芸時評——

129

中野重治氏に——文芸時評——

146

生活と制作と——文芸時評——

146

昭和十一年(1936)

片山晴夫 中野重治『村の家』論——勉次と孫蔵と中野重治——

117

江藤 淳 『村の家』への裏切り——昭和の文人IV——

129

昭和十一年(1936)

国岡彬一 『村の家』

143

林 淑美 『村の家』試論——勉次の家と重治の家——

147

昭和十三年(1938)

大江健三郎 「最後の小説」

171

西澤正樹 「村の家」論——その思想史上の位相——

180

脇坂 充 中野重治論

200

柄谷行人 中野重治と転向

237

平成元年(1989)

加藤典洋 「村の家」から「ノルウェイの森」へ

263

佐藤健一 息子の転向／父の転向

281

佐藤健一 「あるいは『村の家』の『母』をめぐって——

294

昭和の文人「江藤淳」

307

平成二年(1990)

吉本隆明 転向論のひろがり

307

昭和十一年(1936)

古江研也 定 道明 「村

117

平成二年(1991)

木村幸雄 畏と

143

平成四年(1992)

渡辺喜一郎 転向

147

高比良直美 美

171

平成五年(1993)

木村幸雄 「村

200

木村幸雄 「村

237

平成六年(1994)

山城むつみ 書

263

昭和四二年(1967)

野島秀勝 中野重治論 重治にあるわかりにくいもの

171



残部  
3組

# 永井荷風 澤東綺譚

高橋俊夫 編

収録作品論 106 点

全 4 巻 総 1990 頁

第 1 巻 目 次

解説

永井荷風『澤東綺譚』作品論研究文献目録

高橋俊夫 編 9

永井荷風『澤東綺譚』作品論 I

昭和12年(1937)

萩原朝太郎 漂泊者の文字―永井荷風氏の澤東綺譚を読む……………31

佐藤春夫 『澤東綺譚』を読む……………36

片岡良一 『澤東綺譚』と『雪国』と『冬の宿』……………41

平井程一 永井荷風論―読『澤東綺譚』……………45

昭和22年(1947)

佐藤春夫 澤東綺譚……………

吉田精一 澤東綺譚……………

昭和24年(1949)

高橋義孝 『澤東綺譚』……………

昭和26年(1951)

斎藤茂吉 澤東綺譚……………

福田恒存 澤東綺譚……………

高橋俊夫 1

昭和28年(1953)

伊庭心猿 墨東古調―統荷風翁の発句……………

昭和29年(1954)

平野 謙 永井荷風『澤東綺譚』……………

昭和30年(1955)

岡野他家夫 『澤東綺譚』……………

吉行淳之介 『澤東綺譚』……………

小山勝治 『澤東綺譚』小史……………

宮城達郎 『澤東綺譚』の含む諸問題……………

昭和31年(1956)

相磯凌霜 餘話……………

前田 豊 『澤東綺譚』の周辺……………

昭和63年(1987)

松田良一 『澤東綺譚』論―ラチオと蚊の音……………

江藤 淳 メタ・小説としての『澤東綺譚』……………

(紅茶のあとさき十三)

平成4年(1992)

新藤兼人・馬場当(対談) 荷風の生と性……………

平成5年(1993)

劉 建輝 『澤東綺譚』―その文人世界の構造……………

島村 輝 『澤東綺譚』の方法……………

中島国彦 『澤東綺譚』における秩序と混沌……………

金子明雄 一人の(わたくし)・複数の(わたくし)……………

―『澤東綺譚』の領域……………

桜井 透 永井荷風 東京・玉の井……………

新藤兼人 『澤東綺譚』について……………

(参考資料)

澤東綺譚関係記事抄 断腸亭日乗……………

永井荷風『寺じまの記』……………

木村莊八(澤東綺譚の挿絵を描いた画家)の文章五種……………

## ●目次より(縮小)

### 第II巻 目次

#### 永井荷風『澤東綺譚』作品論II

昭和46年(1971)

小門勝二 澤東綺譚自筆原稿複製にあたって……………

高橋俊夫 『澤東綺譚』と近世文学……………

高橋俊夫 『澤東綺譚』と『荷風日記』(断腸亭日乗)……………

野口富士男 『澤東綺譚』覚え書……………

野口富士男 『覚え書』補遺……………

昭和47年(1972)

唐木順三 永井荷風―『澤東綺譚』まで……………

竹盛天雄 解説……………

高橋俊夫 荷風の小品「放水路」の推敲過程……………

―『澤東綺譚』の原型の探索……………

種田政明 『澤東綺譚』(管見・荷風文学素稿の十五)……………

昭和48年(1973)

大野秋紅 私家版『澤東綺譚』その俳句と写真……………

坂上博一 『澤東綺譚』論……………

小門勝二 澤東綺譚の町―テレビ台本……………

古屋健三 『澤東綺譚』―この事実の夢……………

新延修三 永井荷風……………

昭和54年(1979)

秋庭太郎 『澤東綺譚』好評 附お雪モデル考の事……………

吉行淳之介 解説……………

427

409

無 署名 モデルがいた澤東綺譚のお雪さん……………

404

三好文明 吉行淳之介ノート―永井荷風との関係……………

392

磯田光一 澤東の秋―永井荷風(九)……………

375

高橋俊夫 古川柳と『澤東綺譚』……………

373

『すみだ川』と『澤東綺譚』を中心に……………

355

高橋俊夫 『梅暦』と荷風小説(その風土の連関)……………

3

残部  
1組

# 空 逝 積 死者の書

石内徹 編

収録作品論 99 点

全 3 巻 総 1180 頁

### ●目次より (縮小)

第 1 巻 目 次

『死者の書』研究小史

石内 徹 1

積道空『死者の書』作品論研究文献目録

石内 徹編 19

積道空『死者の書』作品論 I

石内 徹編 19

昭和14年 (1939)

白居雅雄

積道空の「死者の書」

47

室生犀星

徹する処なし 諸家の諸作品を通読して

48

(文芸時評 (5))

昭和18年 (1943)

堀 辰雄

大和路信濃路「死者の書」

48

昭和19年 (1944)

芳賀 壇

積道空『死者の書』作品論 II

48

昭和21年 (1946)

山本健吉

昭和49年 (1974)

川村二郎

解説

5

篠田一士

この珍貴の感覚(下)——詩から小説へ——

14

野崎守英

彼方なるものとしての光——折口信夫『死者の書』——

31

昭和50年 (1975)

大岡昇平

折口学と文学

47

笠原伸夫

逆光の近代

47

川村二郎

『死者の書』再説——文学の根への問い

82

昭和51年 (1976)

佐藤えみ子

『死者の書』——試論

97

森 馨根

折口信夫『死者の書』論——日本文学の本質——

106

昭和52年 (1977)

天沢退二郎

『死者の書』あるいは二つの(作品)

123

井口樹生

『死者の書』論

128

昭和58年 (1983)

中村 浩

二上山と大津皇子

28

昭和23年 (1948)

吉田健一

小説論 平野謙『島崎

積道空『死者の書』……

62

昭和28年 (1953)

神西 清

不思議な永遠の若さ

加藤道夫

『死者の書』と共に

68

昭和29年 (1954)

坂本徳松

『死者の書』の向日性

藤井貞文

『死者の書』の向日性

81

昭和34年 (1959)

江藤 淳

小説の文体

87

昭和53年 (1978)

大室幹雄

二

笠原伸夫

結

174

昭和54年 (1979)

藤井貞和

『死者の書』

東郷克美

『死者の書』

162

昭和55年 (1980)

吉益 讓

『折口信夫の『死者

中村 浩

『死者の書』地名考

123

昭和57年 (1982)

梶木 剛

『死者の書』/積道

昭和58年 (1983)

江藤 淳

女の旅立(女の記号学(3))

28

昭和59年 (1984)

松浦寿輝

神の聲音

28

昭和60年 (1985)

長谷川政春

重層する声——『死者の書』の語りと構造——

森安理文

『死者の書』論

205

石内 徹

折口信夫に於ける神話伝説

村井 紀

『死者の書』について

201

昭和62年 (1987)

川村二郎

二上山と『死者の書』

塚本邦雄

『死者の書』

118

昭和63年 (1988)

岡谷公二

『口ぶえ』から『死者の書』へ

高橋広満

『死者の書』の時

93

昭和64年 (1989)

夏石番矢

落日のカタルシス

折口信夫『死者の書』の重層性

死と再生

123

昭和65年 (1990)

石内 徹

『死者の書』の世界

黒衣の神——折口信夫『死者の書』の魂乞い曼陀羅

上——折口信夫『死者の書』の魂乞い曼陀羅

下——折口信夫『死者の書』論

174

昭和66年 (1991)

持田叙子

享楽主義者の系譜

平成3年 (1991)

石内 徹

『死者の書』の重層性

平成4年 (1992)

石内 徹

『死者の書』の重層性

平成5年 (1993)

石内 徹

『死者の書』の重層性

平成6年 (1994)

石内 徹

『死者の書』の重層性

平成7年 (1995)

## 新文学研究

全 22 冊・別冊 1

曾根博義監修 [大空社 1994. 6]  
菊 / 四六判 4-87236-912-2  
定価 (本体 145,631 円+税)



■伊藤整編輯、金星堂刊『新文学研究』全 6 輯 (昭和 6. 1 ~ 昭和 7. 5)、『列冊新文学研究』全 16 冊 (昭和 7. 9 ~ 8. 6) の複製 (フランス装)。ジョイス、プルースト、ロレンス、ウルフ、ハックスリー、パウンド…20 世紀文学の最前線を受容 (研究・翻訳・紹介) した昭和モダニズムの華。別冊は解題・総目次・索引。

## トルストイ研究

全 29 冊・別冊 1

柳富子解説 [大空社 1985]  
菊判 4-87236-013-3  
定価 (本体 55,000 円+税)



■トルストイ会編・新潮社刊、1916・大正 5 年 9 月 ~ 1919・大正 8 年 1 月刊 (総約 2360 頁) の複製 (函入)。内田魯庵、中村白葉、昇曙夢、大泉黒石、八杉貞利、米川正夫、岩野泡鳴、島村抱月、豊島与志雄、本間久雄、広津和郎、小山内薫、片山伸、木村毅、近松松江、山村暮鳥、室生犀星、阿部次郎、相馬御風、徳富蘇峰、等々、当代の文芸・思想・宗教等の分野の第一線執筆陣による、論文・随想・翻訳を掲載。別冊は解説・全執筆者索引・総目次。

## プルースト研究

全 4 冊・付録 1

[大空社 1985. 2] 4-87236-007-9  
定価 (本体 15,000 円+税)



■フランス装アンカット版 (完全複製) (195 × 185 ミリ、函入)。1934・昭和 9 年 7 月・9 月・10 月・12 月 (作品社刊) に、『作品』同年 9 月所収の「誌上出版記念会」を付録。伊吹武彦、生島遼一、井上究一郎、市原豊太、淀野隆三、河盛好蔵、山内義雄、渡辺一夫、青柳瑞穂、杉捷夫、等々錚々たる執筆・訳者陣。

## 人間

全 71 冊・別巻 1

小田切進監修  
高橋英夫解説  
[大空社 1992. 9-1993. 3]  
A5 判 (別巻上製)  
定価 (本体 200,000 円+税)



\*残り1セット

■戦後日本文学の出発点となった記念碑的文芸雑誌 (鎌倉文庫刊、昭和 21. 1-26. 8。編集長・木村徳三) の複製。石川淳「処女懐胎」、高見順「わが胸の底のここには」、織田作之助「世相」、井伏鱒二「柘助」、堀田善衛「広場の孤独」、佐多稲子「私の東京地図」、上林暁「聖ヨハネ病院にて」、島木健作「赤蛙」、また河上徹太郎、中村光夫、桑原武夫、平野謙、中島健蔵、加藤周一、荒正人、花田清輝、吉田秀和、岸田國士、林達夫、等々 400 人以上の豪華執筆陣は枚挙にいとまがない。三島由紀夫は本誌から文壇デビュー。別巻：鎌倉文庫と文芸雑誌「人間」(内容) 戦後の記念碑的雑誌「人間」(小田切進：遺稿) / 「人間」解説 (高橋英夫) / アンソロジー：鎌倉文庫と「人間」(川端康成、高見順、巖谷大四、永井龍男、三島由紀夫、遠藤周作ほか) / 『人間』時代 (木村徳三) / 総目次 / 挿画家名索引・著者名索引 / 鎌倉文庫出版リスト、鎌倉文庫参考文献

## 永井荷風 「四畳半襖の下張」惣ざらえ

高橋俊夫 編著 [大空社 1997. 9]  
A5 判・上製・240 頁 4-7568-0565-5 \* 残部数冊  
定価 (本体 5,000 円+税)

■古今東西の文献による綿密な注解によりすべてを解き明かす。(内容)「四畳半」入門 / 本文と注解 / その初音 (はつ) と仇浪 (あな) / 「四畳半」裁判に於ける証言三種。  
(推薦) 南博「本書は、一個の自由人として、戦争や政治に毒された現代文明から脱却して、超然と人間のエロスのな存在を追求した、稀有な大作家の傑作をあますところなく、浮き彫りにした労作である。」

## 釈迢空 人と文学 \* 残部数冊

石内徹 著 [大空社 1995. 7] A5 判・410 頁  
4-7568-0080-7 定価 (本体 7,767 円+税)

## 折口信夫研究資料集成 全11巻・別巻1

朝倉治彦監修・石内徹編 [大空社 1994. 10] B5 判  
4-87236-928-9 定価 (本体 145,631 円+税)  
\* 残部数組

\* 文芸雑誌

原装複製

★ いずれも残部数組

## 増補改訂 現代日本文芸総覧

文学・芸術・思想関係雑誌目次及び解題

小田切進 編 全4巻

[明治文献資料刊行会刊・大空社発売 1992. 12]  
A5 判・上製 4-87236-258-6  
定価 (本体 58,058 円+税) \* 残部数組

■現代文学の主流を形成した思想・文芸関係主要雑誌を網羅 克明な「目次」詳細「解題」「索引」

〈商品の状態について〉

刊行年が古い為、読書に支障はないものの、経年による劣化 (小口のみみ、表紙クロスの焼け等) が見られます。ご注文の際にはご承知おきのほどお願いいたします。(大空社出版)

# 近代文学作品論叢書

大空社 1995-1998 刊行

[体裁] B5 判・上製・クロス装

残部  
僅少

(2024.9.15)

掲載ページ	書名	編者	巻数	刊行	ISBN	定価(税込)	本体価格	在庫
—	与謝野晶子「みだれ髪」	逸見久美 編	3巻	1977.11	4-87236-823-1		(品切)	
4	田山花袋「蒲団」	加藤秀爾 編	3巻	1998.7	4-87236-825-8	49,500円	45,000円	3組
5	夏目漱石「夢十夜」	坂本育雄 編	3巻	1996.6	4-87236-817-7	48,058円	43,689円	2組
—	柳田国男「遠野物語」	石内徹 編	4巻	1996.6	4-87236-818-5		(品切)	
6	長塚節「土」	梶木剛・河合透 編	4巻	1998.7	4-87236-826-6	66,000円	60,000円	3組
—	谷崎潤一郎「刺青」	笠原伸夫 編	2巻	1997.6	4-87236-821-5		(品切)	
—	斎藤茂吉「赤光」	梶木剛 編	5巻	1995.11	4-87236-813-4		(品切)	
—	芥川龍之介「羅生門」	志村有弘 編	2巻	1995.11	4-87236-816-9		(品切)	
7	森鷗外「渋江抽斎」	長谷川泉 編	1巻	1996.11	4-87236-819-3		(品切)	
8	志賀直哉「和解」	池内輝雄 編	2巻	1998.12	4-87236-827-4		(品切)	
9	島崎藤村「夜明け前」	剣持武彦 編	4巻	1997.11	4-87236-824-X	66,000円	60,000円	2組
10	西脇順三郎「Ambarvalia」	澤正宏 編	2巻	1997.6	4-87236-822-3	33,000円	30,000円	5組
11	川端康成「雪国」	岩田光子 編	3巻	1996.11	4-87236-820-7	48,058円	43,689円	5組
12	中野重治「村の家」	佐藤健一 編	3巻	1998.12	4-87236-828-2	49,500円	45,000円	1組
13	永井荷風「墨東綺譚」	高橋俊夫 編	4巻	1995.3	4-87236-814-2	61,942円	56,311円	3組
14	釈迺空「死者の書」	石内徹 編	3巻	1995.3	4-87236-815-0	41,650円	37,864円	1組

学術資料出版

大空社出版

東京都北区中十条 4-3-2  
(〒114-0032)  
TEL:03-5963-4451  
FAX:03-5963-4461  
eigyo@ozorasha.co.jp

お  
取  
扱  
い